2002年12月2日

セミナー通信　Ｖｏｌ．１０４　西村セミナールーム

誰！これやったの？

自分が学生時代お世話になった恩師の中には、強烈な授業をされた先生が何人かいらっしゃる。そのお一人が高校時代の数学の先生なのだが、今でも鮮明におぼえている。

宿題で自分が当たった問題を授業前に黒板に書いておくのだが、その先生は教室に入り、その解答を見るやいなやの第一声が、「誰！これやったの？立ちな。」なのである。もうこうなったら逃げられない。自分の証明で多少不安があった箇所に対する指摘はもとより、自分自身気が付いていなかった理解の甘かった点などに、「なぜ」「どうなっている」「説明しな」と徹底した追求が行なわれる。もちろん単にいじめているわけではない。こちらが基本的な点で理解できていないとわかると、先生はさらに基本的な例題を出しつつ「これならわかるの？」と導いて下さることもしばしばであった。

数学とは論理の学問であり、結果よりもその論証の過程を習うことが重要であることを１年間かけて徹底的にたたき込まれた。私たちに“数学を教えよう”とするその情熱はまさに鬼気迫るものがあった。

４月の最初の授業などは、まずその科目のガイダンスから始める先生が多い中、“無駄な時間をかける気はない”とでも言うかのように、自己紹介も無しにいきなり「教科書○○ページを開けて」と授業を始めた先生である。また「出席番号17番。立ちな！」といつ指名されるかわからない。とにかく１時間の授業時間中、誰一人として気の抜けない、張りつめた授業であったことを記憶している。

あまりの厳しさに生徒みんなに好かれる先生とは言えなかったが、我々のような一部のマニアな？生徒には絶大なる信頼があった。特に数学準備室まで授業後に質問に行ったりするときは、授業の時とは別人かと思えるほどやさしく丁寧に教えて下さった。

よくあまりの我々の出来なさに「あなたたちが私の後輩だと思うと泣けますね～。」（実は本当に高校の先輩なのである）と言われたこともあるが、その先生の言葉であれば、「不肖の後輩で申し訳ありません。」と頭を下げるしかなかった。

40人からいる生徒を授業に集中させ、理解させるには、まずその先生が教壇に立っただけで発するオーラが必要であると思う。もちろん授業を通じて生徒を感動させる技量、さらにわからせようとする強い情熱も必要であろう。

何年か前に定年後に私立で教鞭を執っていらっしゃると聞いたことがある。今もなおあのパワーで授業をされているのかわからないが、私自身、数学の授業のときはあの先生をお手本にしているところがある。

小柄な女の先生であったが、私はまだまだ足元にも及ばない。